

仏教保育に対する保育科学生の意識変化について

—「仏教保育」の授業を中心に—

佐藤 達全

一、はじめに

一般に、仏教寺院を母体として設立・運営されている幼稚園や保育園で行われている保育を仏教保育ということがある。もちろん、認可を受けた幼稚園や保育園は学校法人・社会福祉法人・宗教法人等が運営しており、理事長や園長が寺院住職であっても、公共的な施設としての立場が要求されることは言うまでもない。それゆえ、保育の内容についても、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」といった国が示した基準に従って展開されている。それでは、仏教保育にはどのような特徴や存在意義があるのだろうか。

二、仏教保育の立場

(1) 仏教保育とは何か

仏教保育がどのような保育であるかについては、種々の見解が示されている。そのいくつかを示すと、

① 仏教保育とは、広く仏教の原理によって成り立っている保育である。(日本仏教保育協会編『わかりやすい仏教保育総論』チャイルド本社 二〇〇四年二月)

② 仏教に基づいて、乳幼児の人格の完成をめざして行う保育が仏教保育です。(『月刊仏教保育カリキュラム』一九九五年六月)

③ 仏教保育は、仏教という宗教を基盤として、仏教の説く教えを生かした保育ということ。『月刊仏教保育カリキュラム』一九九八年八月)

④ 仏教保育は、一般の知的技術的方面よりも情緒的に、信仰的に重点を置いていただけでありまして、現代、ともすれば心に潤いを失いがちな幼児の保育に関して、一般の保育の基盤こそ、この保育がなされねばならない。

(浄土真宗本願寺派・熊本教区保育連盟編『仏教保育必携』一九七八年六月)

このほかにも、仏教保育とは何かという説明は数多く示されている。^(注1) いずれの見解も、言わんとしていることは伝わってくるのだが、仏教を勉強することが目的でない保育科の学生(あるいは現場の保育者)にとっては、その意味するところがすぐには理解できないのではないだろうか。

たとえば、①の場合は「仏教の原理」が何を意味しているのかわからないであろう。②の場合は、そもそも「人格の完成に仏教がどのように関わっているのか」がわからない。③の場合も同様である。④の場合は、仏教保育は

「心の問題」に重点を置いていくことは了解できるが、それでは仏教保育でなければ「心」を育てることができないのであろうかという疑問が生じてくる。いずれにしても、保育を学んでいる（仏教を知らない）保育科の学生の関心を引き起こすには必ずしも十分な説明とは言えないであろう。

仏教保育に対する学生の関心が低い理由は他にもある。それは、

- ① 仏教保育が免許法に定められた必修科目でないこと
 - ② 現代の日本では宗教教育が十分に市民権を得ていないこと
 - ③ 全国の幼稚園・保育園に占める仏教系幼稚園・保育園の割合が非常に少ないこと
 - ④ 認可を受けた幼稚園や保育園の保育内容の基本は「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」に基づくこと
- 等である。いずれにしても、仏教保育は仏教系の幼稚園や保育園の一部でしか行われていないため、その存在が広く認識されるには至っていないのである。
- そこで、筆者は仏教保育を「いのちを大切にしましょう」というお釈迦さまの教えを、保育者がみずから実践することによって子どもたちの心に育てていこうとする保育と説明している。

（２）免許法による必修科目でないこと

仏教保育は、幼稚園教諭の免許状を取得するために教員免許法で定められた教科ではない。また、保育士資格を取得するための科目にも指定されていない。仏教系の大学や短大が、建学の精神に基づいて独自に設定したものである。そのため、この授業を開講している大学（短大・専門学校）が非常に少ないことも、学生の関心が低調な原因になっていると考えられる。

ただし、それが仏教保育の授業を開講する意義がないということにはつながらない。むしろ、人格の基礎が形成される時期の乳幼児の保育は保育者の人間性に影響される部分がきわめて大きいことを考えると、保育者を養成する大学が建学の精神に基づいた仏教保育の授業を行う意味は非常に大きいと言える。そのために重要なことは、講義のねらいをどのように設定して学生の心に伝えるかになってくる。

そこで、鶴見大学短期大学部保育科で行っている仏教保育の授業（半期一五回）を受けた学生の意識について報告してみることとする。

（3） 仏教系の幼稚園と保育園の割合

「仏教に基づいた保育の充実を図り、仏教保育を推進する」ために、昭和四年に仏教系幼稚園と保育園及び養成機関の全国組織として発足した社団法人日本仏教保育協会に加盟している幼稚園は七一六園で保育園は五八九園である（『平成一七・一八年版要覧』による）。すべての仏教系の幼稚園や保育園が加盟しているわけではないため、宗派別に組織されている仏教保育団体に加盟している数に比べると半数以下にとどまっている。

日本仏教保育協会編『わかりやすい仏教保育総論』（チャイルド本社 二〇〇四年二月）には、宗派別に組織された保育団体の加盟数が次のように示されている。

天台宗保育連合会Ⅱ一〇〇園・真言宗豊山派保育連合会Ⅱ一一〇園・智山派保育連合会Ⅱ五〇園・臨濟宗妙心寺派Ⅱ一二〇園・浄土宗保育協会Ⅱ四三〇園・浄土真宗本願寺派保育連盟Ⅱ一、〇二〇園・社団法人大谷保育協会Ⅱ五五〇園・曹洞宗保育連合会Ⅱ四一〇園・日蓮宗保育連盟Ⅱ一五〇園で、合計すると二、九四〇園になる。

この場合も、寺院が設立や運営にかかわっている幼稚園や保育園のすべてが宗派別の仏教保育団体に加盟している

わけではない。一方、全国の幼稚園・保育園数は幼稚園一三、七二三園（国公立五、四三一園・私立八、二九二園）平成一九年五月一日現在）で、保育園二二、六九九園（公立一一、八四八園・私立一〇、八五一園）平成一八年四月一日現在）であるから、仏教園の割合は決して多くないことがわかる。そのため、卒業後に仏教系の幼稚園や保育園に就職する学生もそれほど多くはないから、仏教系養成校の学生であっても、仏教保育に対する関心が高くないのはやむを得ないことかもしれない。

三、仏教保育に対する学生のイメージ

こうした状況の中で、筆者が一五回の授業を行うにあたって常に心がけているのは、仏教と保育を「いのち」というキーワードでつなぐことである。対象が保育科の学生であるから、子どもや保育に関する教科に関心が高いことは想像できるが、仏教に興味を示すことはほとんど期待できない。これは大学生一般にも共通していることであろう。もちろん、大本山總持寺を設立母体としている鶴見大学であるから、保育科の学生も一年生の前期に必修科目としての「宗教学」を履修している。『平成一九年度授業計画』には、その講義内容が次のように示されている。

1. 宗教とは（宗教の定義）
2. 人間と宗教のかかわり（宗教の発生と歴史・さまざまな宗教）
3. 一神教の世界（イスラム教・ユダヤ教・キリスト教）
4. 多神教の世界（アニミズム・プレアニミズム・古代ギリシャ・ローマの宗教）
5. 有神論か無神論か（唯一神の否定と仏教、ジャイナ教の立場）
6. キリスト教の倫理（神と人／人と自然、フランチェスコの霊的平等主義、生物進化論とキリスト教）

7. インドの諸宗教と倫理（ヴェーダの宗教とバラモン教、仏教とジャイナ教など）
8. 仏教とはなにか（三つの宝、法の重視、大乘と小乗、仏教の聖典）
9. ブッダの生涯（仏伝、悟りと開教、伝道の旅、死）
10. ブッダの教え（縁起の世界観、四つの真理）
11. 慈悲の思想
12. 仏教の歴史（インドとその周辺、中国・朝鮮、日本）
13. 生命倫理問題と仏教
14. 環境倫理と仏教（地球環境の危機、仏教と自然、エコロジーと仏教、禅の世界）
15. 定期試験

このように、宗教全般を視野に入れた講義が展開され、さらに仏教の教えや開祖・釈尊についても触れているのであるから、学生は仏教についてある程度の知識を持っていることが想像できる。また、大学の行事として大本山總持寺で一泊の坐禅体験をしてもいる。しかし、仏教に対する認識が十分であるとは言えない。

そこで、講義を始める前に仏教やお寺に対するイメージを自由に記述してもらって学生の認識を確認している。次に紹介するのは、第一回目の授業（平成十八年度）で「仏教保育」に対するイメージを自由に書いてもらったもの一部である。

①初めは「仏教なんてやりたくない」と思っていた。すごくいやでした。

②授業を受ける前は、仏教は保育者になるためにいらぬのではないかと思っていました。

- ③ 仏教は保育に関係があるのか疑問に思っていました。
- ④ この授業を受ける前は仏教に興味がなく、何も知りませんでした。
- ⑤ この授業を受けるまでは、仏教に対し「死のイメージ」がとても強かったのですが、授業を受けて逆に「生のイメージが出てきました」
- ⑥ 授業を受けるまでは「なぜ保育者になりたいと思っっている人が仏教について学ばなければならないのか」と思いこんで、まったく興味がわきませんでした。
- ⑦ 最初に仏教保育といわれた時に、保育とどのような関係があるのかがわからなくて、つまらない授業だろうと思っていました。
- ⑧ 今まで、仏教が保育と関係している意味がわからなくて、なぜ勉強しなければならないのかと思っていました。
- ⑨ 授業を受けるまでは、なんでこの授業を受けなければならないのか、どんな関係があるのだろうかと思っただけ全然興味がありませんでした。
- ⑩ 最初は宗教ということに多少抵抗がありました。

保育科には鶴見大学付属高校の出身者も多く、高校時代から仏教行事に触れている学生も少なくないのだが、保育との関連について肯定的に考える学生はほとんど見られなかった。このことは、宗教を単なる「文化」あるいは「死者」との関連において受けとめようとする一般的な傾向とも符合するのではないか。言いかえると、私たちの日常生活とは無縁のものという思いこみである。(注2)

四、仏教保育の授業でめざしているもの

(1) 仏教と保育をどのように結びつけるか

保育科の学生の関心は「子ども」に集中しているため、仏教保育の授業は大学指定の必修科目にはなっていないものの、学生の関心は必ずしも高くはない。講義が開始される前に講義内容に目を通してしている学生がほとんどいないことからもそれは窺える。それどころか、すでに紹介したように「保育の勉強をする自分たちがなぜ仏教保育の授業を受けなければならぬのか」「保育の勉強に仏教がなぜ必要なのか」という疑問を持つ学生が圧倒的に多いのである。

そこで、学生の関心を高めるために、「保育のめざすもの」と「仏教のめざすもの」とを対比させ、「両者をつなぐキーワードとして「いのち」を設定することになっている。まず保育であるが、保育とは「保護」と「教育」の二つの内容を含むものであることを学生と共に確認した。保護する理由は、ポルトマンが「人間は生理的な早産である」と指摘したように、ヒトはきわめて未熟な状態で誕生するからである。このことは、ヒトと同じほ乳類である牛や馬・サル等の誕生と比較してみれば明らかであろう。

それゆえ、ヒトの赤ん坊は相当な期間、他者の援助なしでは生きることができない。つまり、保育の「保」とは未熟な「いのち」を保護することを意味している。さらに、やがては自立して社会に巣立っていくヒトの赤ん坊に知識や行動の仕方を教育することが必要で、それが保育の「育」である。このように、保育とは未熟な「いのち」を保護して教育していくことが目的であるから、キーワードとして「いのち」を設定したのである。

一方、仏教が何をめざしたものであるかを、仏教の開祖である釈尊の伝記から学生に説明した。釈迦族の指導者の子どもとして誕生したゴータマシッダールタ（釈尊の幼名）がどのような理由で出家したかを簡潔に示したものと

て「四門出遊」の話が伝えられている。それは次のようなものである。

あるとき、お釈迦さまは四つあるお城の東門から出たところで老人にであいました。お釈迦さまは、自分もいつかはあのような姿になるのかと思つて心が暗くなつてしまいました。また、南門から出たときに病人にであいました。苦しそうなようすを見て、とても辛くなりました。そして、西門から出たときにお葬式の行列にであつたのです。人びとの嘆き悲しむ姿を見て、すっかりふさぎこんでしまいました。ところが、北門から出たときに修行者にであうと、そのすがすがしい表情や態度にとても感動して出家を決意したと伝えられています。(曹洞宗保育連合会編『曹洞宗保育ハンドブック』 曹洞宗宗務庁 二〇〇三年一月)

このことから、ゴータマシッターダールタが出家したのは自分の力ではどうすることもできない老・病・死という「いのち」の問題と向きあうためであつたことが想像できる。

このように考えると、保育と仏教にはどちらも「いのち」という共通のテーマが存在していることがわかるのである。そこで、両者を結びつけるキーワードとして「いのち」を提示し、その上で学生の関心を高めるために「仏教の勉強をすると、保育の要点がよく理解できる」とも付け加えた。その理由は、仏教は「たったひとつしかない『いのち』、かぎりある『いのち』をどう生きるか」ということが中心の課題であるから、「子どもの『いのち』を守ること」と共通点が多いことを強調するためである。

いずれにしても、仏教と保育を結びつける共通のキーワードを設定し、さらに、「いのち」の問題を考えなくてはならない理由を説明することによつて、保育の勉強になぜ仏教が関係するのかと疑問を抱いていた学生の心を授業に向けるように試みた。

(2) 授業の展開のしかた

両者を結びつけるキーワードを設定したからといって、それで完結したわけではない。問題は仏教の生命観（「いのち」の概念）をどのように講義して、学生の関心を呼び起こすかである。そこで「講義内容」には授業の目的と内容を次のように示した。

仏教というと「お葬式」や「法事」がすぐに思い浮かぶように、日常生活とは無関係という先入観をもっている人が少なくないでしょう。けれども、仏教は「かけがえのない（いのち）」をどう生きてたらいいかを追究した「生き方」の教えなのです。その意味で、乳幼児の「いのち」を保護し、健やかに成長するための援助をする保育と共通点がたくさんあります。この授業では、「いのちを本当に大切にすることのできる保育者」になるために、仏教の「いのちの教え」を学びたいと思います。

担任として保育する子どもひとりひとりの「いのち」を本当に大切にすることができ保育者になるためには、お釈迦さまの教えが参考になります。そこで、お釈迦さまの教えを紹介しながら、私たちの「いのち」はどのようなものなのかについて講義します。その上で、保育者としてひとりひとりの子どもの「いのち」とどのように向きあったらよいかを一緒に考えたいと思います。

また、授業のスケジュールを示すと（『平成一九年度授業計画』）、

1. 保育と仏教をつなぐキーワード「いのち」について
2. お釈迦さまはどんな人か
3. お釈迦さまの教え（仏教）とは何か
4. 仏教と保育の関係について

5. 仏教保育の基礎知識
6. 仏教保育のめざすもの
7. 仏教保育と生命尊重
8. 仏教保育と子育て支援
9. 食育と仏教保育
10. 動物飼育と仏教保育
11. 仏教保育の行事
12. 曹洞宗保育と鶴見大学建学の精神
13. 仏教保育における望ましい保育者像
14. 現代社会の諸問題と仏教保育
15. まとめ

という内容であり、どの講義でも自分自身の「いのち」と向きあつて考えるような話題を取り上げながら進めるようにしている。

その中で特に具体的な問題として提示するのは、「3. お釈迦さまの教えとは何か」で、そこではお釈迦さまが「いのち」をどのように考えたのかについて「天上天下唯我独尊」「諸行無常」「諸法無我」を基本におきながら、

① 私たちの「いのち」の誕生がこの上もなく得難いこと

(注) ヒトの生命の誕生を、精子と卵子が受精する確率を基にして具体的な数字をあげて説明することで、多くの学生は自分がこの世に誕生したことに感動を覚えているようである。それに続けて、赤ん坊に命名する際の両

親の夢や期待についても話すことで、保育者になったときの子どもの向きあい方にも変化が見られた)

②世界中でだれの「いのち」もひとつしかないこと

③その「いのち」は永遠でないこと

④私たちの「いのち」は互いに関係しあって存在していることを説明している。

また「9. 食育と仏教保育」では、私たちが自分の「いのち」を維持するためには自分以外の動物や植物の「いのち」を犠牲にしなければならぬことを説明し、食事の持つ意味や食べる際に留意すべきことがらを考えてもらうようにしている。

講義の目的でも述べたように、仏教が日常生活に関連した教えであると考え、学生は少数派のため、そのつながりが納得できるような説明に工夫を凝らしている。その結果、講義が終了する頃には意図した事柄の理解がある程度達成できたと感じている。それは次に示すような学生の感想から窺える。

五、学習後の意識変化について

(1) 全体的な感想

全体としては、保育と仏教をつなぐキーワードが「いのち」であるということに折に触れて学生に提示したことの効果が現れているように感じられる。そこで、学生の「仏教保育」に対する感想の一部を紹介してみよう。

①この授業を受けるまでは、仏教保育とは仏教の教えを子どもたちに押しつけるような保育だと思っていました、

生命の尊さを教える保育だということを学び、すぐくよい保育のしかただと思いました。また、保育にかぎらず、私自身もふだんの行いを正すよう心がけるようになりました。

②最初は仏教と保育のつながりなど全然わからなかったが、講義を聞いていくうちに「いのち」という大事なテーマが見えてきた。保育をするに当たって、技術面など大切なことはたくさんあると思うが、「いのち」を大切にするといい仏教保育の考えはどんなときでも持ち続けるべき保育の根つこのようなものだと思う。

③最初は宗教ということに多少抵抗がありました。けれども、授業を重ねるごとに、仏教保育はすばらしいものなのだと感じ、もっと知りたい、深めたいと思うようになりました。命を大切にすること、その命の個性を引きだして伸ばすことの大切さなどいろいろなることがわかり、この授業を受けて良かったと思いました。

④仏教保育を学び、保育にとって仏教はとても大切だということがよくわかりました。なぜならば、仏教を通して子どもたちにどれほど命が大切であるかについて伝えることができるからです。私自身、この授業で一番すごいと思ったことは七〇〇兆分の一の確率（筆者注）授業では七〇〇万個の卵子のうちの一つと一億個の精子のうちの一つが受精すると説明している）で私が生まれてきたということを知ったことでした。だから、今こうして生きて、幸せでいられることを大切にしていきたいと思います。

⑤最初はなんで仏教保育を勉強するのだろうと不思議に思っていました。けれども、今まで学んできて仏教と保育は切っても切れないものだと思うようになりました。保育の中には仏教のことがたくさんあり、最初は疑問に思っていたことが嘘のようで、今は仏教保育という言葉がしっくりきます。

⑥私は初め仏教と保育が結びつかなかったのですが、授業を受けて深いつながりがあるということがわかりました。仏教と聞くと私は以前、宗教的な特殊な考え方を持つものだと思っていました。しかし、授業を受けることでそ

の考えが間違っていると確信しました。仏教は人間として生きていく上で大切な考え方であると思いますし、そのような考え方を持つのと持たないのでは保育の仕方にも差が出てくると思います。私は仏教の考え方を心に留めておきたいと思います。

⑦ 仏教と保育の結びつきが初めはまったくわからなかった。仏教系の大学だからこじつけだと思っていたが、授業を通じて「人間」「いのち」ということについて深く考えました。そしてその考えが自然に保育につながり、子どもの心をいかに育てられるか、豊かな人に成長できるような保育をしたいと思うようになりました。仏教と聞くと堅い印象がありますが、考え方がすごく変わりました。

⑧ 仏教保育は、子どもに仏教について教えるのだと思っていました。でも、それは考えが間違っていることに気づきました。仏教保育というのは保育者自身が命の大切さについて考え、お釈迦さまの教えの大切さを心に持って保育し、またそれを子どもたちに伝えていくことだとわかりました。

⑨ 私はこの授業で命の大切さを学びました。お釈迦さまが教えたことは、じつはとても簡単なことで、誰もが気づいていなければならぬことでした。それを人は忘れていて、今回の授業で思い出すことができました。私自身が生きるために他の命が消えているということにもこの授業で気づきました。生きるために犠牲になったものに対して深く感謝し、これからもこの気持ちを忘れずに生活していきたいと思います。生きる意味を考えさせられ、たくさん大切なことを学びました。

⑩ 仏教保育は仏教を取り入れていない幼稚園や保育園には関係のないことだと思っていました。しかし、授業を受けてみると、私たちの生活で忘れてはいけない大切なことはすべて仏教の教えに基づいているのだということがわかりました。特にお釈迦さまの教えは、私たちが生きていく上で当たり前であると思われることを根本か

ら考え直させてくれるものばかりでした。

学生の出席を確認することと同時に、講義内容の理解を確かなものにするために、講義の後に毎回その時間に話した内容について一〇分ほどの時間でコメントを書いてもらっているのだが、ここに紹介したものだけでなく、ほとんどの学生が、仏教がいかに生きたらよいかについての教えであり、仏教保育がどれほどこどもの「いのち」を大切に考えているかということがわかったと述べ、講義前に比べて仏教に対する印象が大きく変わったと記している。

(2) ニつのテーマについての感想

次に、現代社会で解決しなければならない問題でもあり、授業のなかで特に強調している二つの事柄についての感想を紹介しよう。それは「いのち」を大切にすることを育てることであり、その具体的な展開としての「食べる」ということについてである。私たちが生きるためには食えることが不可欠であるが、実際に食べている物は自分以外の動物や植物の「いのち」であるから、食事についての教えは生命について考えるための最高の場なのである。

(イ) 「生命」の教えを聞いた感想

①今日の授業を聞いて、私は子どもたちにもっときちんと生と死について教えなくてはならないと思いました。死んだ生き物が生き返ると思っている子どもが多くいることは大変なことで、そのような考えをしている子どもが生と死についてよく勉強をせずに育ってしまうと、他人の命や他の動物を何とも思わないで痛めつけたり傷つけたり殺したりすることがあると思います。子どもたちには生と死について正しい知識を持ってもらいたいと思

ました。

② 生と死についての授業を聞いて、保育のなかで幼児のうちから子どもに伝えていかなければならないと改めて感じた。自分自身も小さい頃に野菜を育てていた時は成長を見るのがとても楽しかったし、クラスで飼っていたメダカが死んでしまった時はとても悲しかった経験がある。子どもにとって「死」というのは重く、時にはショックを与えてしまう大きなことだが、だからこそ、「死」の場面に出会った時、保育者がどのように子どもに伝えるかが大切だと思った。

③ 保育士になった時、ウサギの死や飼っていた動物の死に出会ったら子どもたちにどう伝えようかと思いました。私が小さい頃、母はいつも「何にでも命があるのよ」と言っていたので、私は食べたおせんべいの袋でさえ死ななことができませんでした。でも、今の子どもたちには命の大切さをしっかりと教えなければいけないと思いました。動物を虐待したり友だちを殺してしまったらという事件が増えているので、命の教育はとても大切だと思いました。

④ 命には必ず終わりがあって、生きていることの尊さや死というものについての理解ができるようになるべきだと思つた。動物などを飼って大切にしていたぶんだけ死を受け入れるのは悲しいことだけれど、そういった経験をしていくなかで、生きていることの喜びや尊さを自然と学んでいけると思う。そして、自分以外の人間に対して、共に支えあって生きているという気持ちをもって、お互いを大切に思いながら生きていくことができるのではないかと思う。

⑤ 命について、生と死のふたつの面から見ることがあると強く思つた。生を知ること、死を知ること、死を知ることで生を知る。双方を学ぶことで、生と死の両方、つまり人間の生き方について真剣に考えていくことができるの

ではないかと思った。かぎりある命を大事にするのは当然のこと。そのかぎりある命でどう生きていくかが重要なことであると同時に、それを子どもたちに伝えることが大切だと思った。

⑥ 生と死の話を聞いて、動物は自分がかわいがるとそれに応えてくれることもあり、死んだときには悲しい気持ちになる。でも、植物の摘果のときなど、植物にも命があることを忘れてはいけなと思った。子どもは大人よりそういう命のことには敏感な部分があると思うから、その気持ちを壊さないように大切にしたいと思った。

⑦ 命とはなんなのか、私にはずっとわかりませんでした。今でもわかっているとはいえないかもしれません。でも、昨年の三月、父方の祖父を亡くし、初めて人の死というものに直面して、人が死ぬということはこんなにも悲しく、胸が痛むものなのだと思いました。祖父のおかげで、命の重みを改めて実感することができたと感謝しています。子どもはとても純粋で、なにかもわかりません。そんな子どもに死や生をどう伝えるか、今はそれを考えています。その答えが出た時、私自身も何かを得られる気がします。

⑧ 命というものはすべてのものにあり、私たちにとって重要なものであることをすごく感じました。その中でも、園で植物（ジャガイモやサツマイモなど）を栽培することで、子どもたちに食べ物のひとつひとつに命があり、ただ眺めているだけでは人間と同じで死んでしまい、毎日、水をあげたりしてお世話をすることで元気に育つと、いった、栽培を通して命の大切さを子どもたちに伝えることはとても良いことだと思いました。

⑨ 子どもには楽しい思いをさせたいと思うけれど、それだけではだめなことがわかった。悲しいことや辛いことも時には必要で、これから知る嫌な面もある現実を少しずつ知って下準備のようなものが必要だと思った。子どもがそういうものに直面した時の大人のケアがとても大切だと感じた。私も先生の話のなかのお母さんの立場だったら、子どもに共感したいし、お墓を一緒につくろうと思う。

⑩今日、先生の話を聞いて生命について深く考えることができました。そして、高校生の時に飼っていたウサギが死んだ時のことを思い出しました。動かなくなったウサギを抱き上げた時、つめたくて重くて、かたい感触が忘れられません。子どもがこのようなできごとに出会った時、保育士としてどのように子どもに生命の大切さを伝えればよいのか、考えていきたいと思います。心臓がドキドキ動いていること、息ができること、元気に生きていられることを当たり前だと思わないようにしていきたいと思います。

(ロ)「食育と仏教保育」についての感想

①人間は食事をする上で、必ず生きものを食べていると聞いて、ハッとしました。そう考えると、すべてのものに命はあって、それを毎日食べているのに何とも思っていなかったことを申し訳なく思った。

②食することは生きていくために必要です。それは人間も動物もすべて同じことです。けれども、食することが他の動物のいのちを奪っていることに改めて気づきました。食べ物を粗末にすることがないようにしなくてはなりません。食育もこれからの保育で大切になることがわかりました。

③食することは私たちが生活していく上で、なくてはならないものです。しかし、毎日の習慣のせいから、食べられて当たり前といった考えが私の中に定着していて、お腹がいっぱいなのだから残す、嫌いだから食べないといったように、食物に対する感謝の気持ちが薄れていました。しかし、今日の授業をきっかけにもう一度見直していきたいと改めて思いました。

④私たちはふだん、肉や魚など、あらゆる生き物を食べて生活している。しかし、そのことが当たり前になってしまい、感謝の気持ちを忘れがちであるのは確かだと改めて思った。動物や植物を食べるのは当たり前と思うのは、

人間の勝手な思い上がりだという話を聞いて、もう一度、食べる時に食物を粗末にしない、食物の命を正しく活用するなどをしつかり考えていきたいと思った。

⑤ 食べることを今日まで深く考えたことはなかった。食べることは自分が生きていくためにしている行為なので、当たり前のことだと思っていた。でも、先生の話を聞いて、「食べる＝他の命を殺している」ということを実感した。「いただきます」の意味も先生の言うとおりでだと思う。家で「いただきます」をきちんと言うてから食べることは少ないので、今日からきちんと挨拶をしてから食べようと思った。

⑥ 食べるということは健康のためとかお腹が減らないためだと第一に思っていました。でも、今日の授業を受けて、食べるということは他の命をもらうということ、食べることで心も育てていくことがわかりました。いつもは感謝の気持ちなど、作ってくれた人にするものと思っていました。それだけでなく、人の役にも立てるようにしたいと思いました。

⑦ 今、何もかも手に入る世の中で、食べることは当たり前になっています。しかし、他の国では食べたくても食べるものがなくて死に至る人もたくさんいます。日本では食べものに困るということは全くといってよいほどないので、食べものに対する感謝の気持ちが疎かになっていく気がします。そこで、自分で種から育てることなどを経験し、自分も含めてもっと食べるものがあるべきだと思っています。

⑧ 私たちが生きているのは、他の命を食べて生きているのだということに改めて感じた。だから、食事をする時は食物に対する感謝の心を忘れないこと。食物を粗末にしないこと。食物の「いのち」を正しく活用することを忘れない。そして、そのエネルギーを他の人のために使って感謝の思いを示すことが大切だと思った。

⑨ 今日の授業で食べるということについて聞くまで、感謝をするということをおぼえていたかもしれません。食べる

というのは当たり前前と違って、動物や植物の命を犠牲にしていたということを忘れていました。人は食べなければ生きられないので、感謝の気持ちを忘れず、粗末にしないで「いのち」を正しく活用し、命を大切にしなければいけないと改めて思いました。

⑩今日は食を通して生命の大切さを学びました。植物を植える時に、間引きをしますが、私は幼心になぜ一緒に同じように生えてきた芽を取らなければいけないのかと、間引く意味を聞いてからも納得がゆかないまま今日まで来ました。ですから、今日のこの問題について触れ、同じような気持ちの人がいることがわかり、とてもうれしくなりました。子どもも同じように思うかもしれません。そのような時、どんな話をすればいいのか、どのようにしたら伝わるのかを今のうちから自分なりの言葉で考えておきたいと思いました。私も含めて、本当になんでもスーパーで買ってしまふので、野菜や果物のでき方もあまり知りません。作物を育てる過程で、一部を取り除いて他のものに養分がいくようにする摘果という作業があります。今まではあまり気にはしていませんでしたが、今日の授業を聞いて、やはり私たちの食べものは本当に多くの命が関わっているのだと改めて感じました。

六、現代社会に必要な仏教保育

福祉や教育は仏教寺院にその起源を遡ることができ、近代化と共に次第に国家の政策に移行されていった。多くの財源や人材を必要とするこれらの事業を寺院の活動でカバーすることができないことは確かで、幼児教育や保育においても同様である。幼児教育にも保育にも「子どもを保育し教育する」という保育本来の目的があるのだから、仏教寺院が経営する幼稚園や保育園だからといって、寺院運営や布教の手段であってはならない。

しかし、だからといってそれが仏教保育を否定することにつながるものではない。むしろ、現代のように必ずしも

人間の「いのち」が大事にされているとは言いつてもたつたひとつしかない『いのち』を大切にしましょう」という仏教の人間観に基づいた保育を推し進めなくてはならない。

古くから日本人は「死」を忌み嫌う傾向があった。それは、死者の出た家を「忌中」として区別したことからも窺えよう。「忌中」の習慣は現在までも続いており、さらに小学校学習指導要領でも、授業で死について触れることを「縁起でもない」として避ける傾向がある。^(注3)これでは子どもたちに「いのち」を本当に理解させることはできないであろう。その考えを改めないかぎり、「人間は死んでも生き返る」と思っている小学生が三割もいるという現実を變えることはできない。「いのち」は、生と死の両方に目を向けなくてはその本当の姿はわからないものである。^(注4)「死」を遠ざけて「いのちを大切にしましょう」といくら叫んだところで、それはむなししい叫びで終わってしまうのではないだろうか。

昔は「死」を忌み嫌い日常生活から遠ざけようとしてはいたものの、大家族の生活では老人は身近な存在であったから、老いていく姿やその最期に立ち会うことも少なくなかったであろう。また、田畑が近くにあつて日常的に野菜や家畜に触れる機会があつたはずである。つまり、自然な形で生き物の「いのち」に触れることができたのである。

ところが、現代は核家族化や都市化が進んで祖父母と触れあう機会が減少し、動植物に接することも少なくなった子どもたちは、「生きている」ことや「死ぬ」ことを実感できなくなつてしまつたと言われる。このことは、子どもにかぎらず、子育てをしている大人にも当てはまるかもしれない。^(注5)

そうしたことが影響しているのであろうか。「いのちを大切にしましょう」ということは、だれもがわかっているはずなのに、自殺やいじめが後を絶たない。また、乳幼児に対する虐待も頻発している。私たちが生きるためには食物を食べなくてはならないが、食物が動植物の「いのち」であることをどれだけの人が認識しているであろう。その

ため、食物に対する感謝の念を忘れたり粗末にしたりする人が非常に多いことが指摘されている。

「心を大切にする保育」として、生かされていることに対する感謝の気持ちや他者に対する思いやりの気持ちを育てる保育が今ほど求められる時代はないのではないだろうか。その様な視点に立つと、全体としては少数派であるものの、仏教保育に期待されることはきわめて大きいと言えよう。その意味で、たとえ仏教系の幼稚園や保育園に就職しなくても、保育科の学生に仏教保育のめざしているものをしっかりと理解してもらうことには大きな意味があると考えている。

注 記

(注1) 拙稿「人間教育の原点と仏教保育について」(育英短期大学研究紀要一四号 一九九六年七月) 参照

(注2) 拙稿「保育科学生の宗教意識」(駒沢宗教学論集第一四輯 一九九八年三月)

(注3) このことについて伊藤隆二(東洋大学教授)は「これまでの学校教育においては『死』がとりあげられることはきわめて少なかった」ことを指摘し、その理由として「とくにわが国では『死』は縁起が悪いものと考えられているために、人びとはそれを口にすることをためらう傾向がある。また、学校教育では、教師は子どもや若者たちに夢や希望を抱かせ、未来は明るいことを知らせる役目を持つ、という常識があったために、『死』だけでなく、『病』『老』といったテーマをとりあげることがほとんどなかったといってもよい」と述べている。(伊藤「生命尊重は『病』や『死』の学習から」中等教育資料・平成八年五月号所収)

(注4) 『学校飼育動物と生命尊重の指導』(教育開発研究所 平成一五年六月)
小学生の三割が「人は死んだら生き返る」と思っているという調査(読売新聞二〇〇六年一月二二日)も報告されていて、早急な対応が必要である。日野原重明(聖路加国際病院理事長)は「よく生きることがよく死ぬこと」として「死生学」を提唱し、生と死を一体にして捉えることの必要性を強調している。『死生学がわかる』朝日新聞社 二〇〇〇年六月)

(注5) 拙稿「生命尊重の保育について―仏教保育の果たすべき役割―」(日本仏教教育学研究一二号 二〇〇四年三月) 参照